

## 2017年度 日本社会心理学会「若手研究者奨励賞」候補者の選考経過と選考結果

2018年1月12日

本年度の「若手研究者奨励賞」受賞者の選考経過と選考結果をご報告申し上げます。本年度は24件の応募があり、4名の選考委員による厳正な審査の結果、以下の4名を受賞者と決定いたしました。選考委員の先生方に各自、講評を書きいただきましたので、あわせてそちらもご覧ください。

「若手研究者奨励賞」選考委員長 唐沢かおり

### 受賞者（応募書類受付順）

1. 竹部成崇（たけべ まさたか）一橋大学大学院社会学研究科博士課程3年  
安定を望む心をもたらす社会の不安定－不況の知覚が集団内分裂・集団間紛争を導くメカニズム－
2. 谷辺哲史（たにべ てつし）東京大学大学院人文社会系研究科博士課程1年  
ロボットが人間から援助を引き出す影響過程
3. 松尾朗子（まつお あきこ）名古屋大学大学院環境学研究科博士課程3年  
日常的な道徳判断における判断基準の日米比較
4. 打田篤彦（うちだ あつひこ）京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程1年  
地域共同体における公共空間の景観情報に基づく社会関係資本の推定

### 【選考経過】

#### 1) 募集

7月6日に、広報担当の宮本先生に依頼して、今年度の募集要項と応募用紙を学会のHPにアップするとともに、募集開始をメールニュースで会員に告知をした。9月30日に応募を締め切り、総数24件の応募があった。

#### 2) 選考委員選出と第一次審査

選考委員は応募者の指導教員、共同研究者ではないことを条件に理事から2名、一般会員から2名を依頼し、下記の4氏（敬称略）について会長と常任理事会の承認を得た。

理事： 堀毛一也（東洋大学）、池上知子（大阪市立大学）

一般会員： 新谷優（法政大学）、村上史朗（奈良大学）

第一次審査は、選考委員をお互いに匿名としたうえで、個別に各応募に対して、A（優れている）、B（普通）、C（やや劣っている）を付与することで行った。なお、A評価は

5本以内とした。選考委員長は、指導学生からの応募があったため、審査には加わらなかった。また、選考委員から利害関係の申告があった場合には、その応募者に対しては審査から外れていただいた。なお今年度から、応募者を匿名化せずに審査を実施している。

### 3) 第二次審査

第一次審査結果に対して、A評価は40点、B評価は10点、C評価は5点をそれぞれ与えて得点化し、4名の選考委員の合計点を算出した。得点が上位の10名を第二次審査の対象として、選考委員間でメール審議を行った。選考委員が利害関係を申し出た応募については、可能な得点の範囲を考慮したうえで、審査対象に含めるかどうかを判断した。

メール審議では、研究の学術的価値、予測される知見の新奇性、倫理的配慮についての意見が提出され、意見交換の結果、上位4名を受賞対象とすることで合意した。さらに続く得点の応募についても、受賞にふさわしいものがあるかどうか検討したが、受賞に該当する応募はなく、今年度は4件を受賞対象として推薦することで合意した。

以上

## 2017年度「若手研究者奨励賞」選考委員4名による講評

### 堀毛一也先生（東洋大学）

本年の応募は24件と、例年にくらべ少数であった。ただ、内容的にはいずれも充実しており、読んでいて興味深く、大変刺激をうけるものばかりであった。私は今年で職を辞すことになるが、社会心理の将来は明るいという期待を抱かせる研究内容が多かった。そのような中、最終的に候補となった4件には、説明が丁寧で具体的であること、発想が独創的であること、着実な成果が期待できること、という共通点がある。これらは、従来の選定基準とも変わらない側面で、今後応募される際にも、意図的に取り入れていただきたい視点でもある。4人の審査者の評価は、ほぼ一致したもので、見方はそれぞれかもしれないが、こうした側面が評価の基盤となっていることが推察される。本年もうひとつ選定の基準となった側面として、参加者への倫理的配慮があげられる。この問題が指摘されて、他の面では優れているが、惜しいところで落選した申請があった。昨今よく話題にされる問題で、申請にあたっては一段の配慮を行うことが望まれる。今後も引き続き、若手の方々のより一層の頑張りを期待したい。

### 池上知子先生（大阪市立大学）

申請書を拝読し、まずは若い研究者の皆様の意気込みに感銘を覚えました。いずれもきわめて現代的なテーマに挑もうとされていることが伝わってきたからです。私は、どちらかと

例えば、着想の斬新さや独創性に重点を置くことが多いのですが、今回は、その点では甲乙付けがたいように感じました。そこで、あえて方法論に注目し、新しい手法を取り入れるなど創意工夫がみられるかという観点から評価をいたしました。ただ、その際にも、科学的な手続きがきちんと踏まえていることを大前提といたしました。型破りで奇抜なだけの研究からは、意味のある成果は生まれないと考えているからです。研究を評価するとき、理論志向の基礎的研究と実践志向の応用的研究を二項対立的にとらえる傾向があるように思いますが、私自身は、理論的な裏づけのない実践は、結局のところ役に立たず、また、現実の人間や社会の問題に根ざさない基礎研究は、学術的価値を持ちえないのではないかと考えております。最終候補に選ばれた研究課題の多くが、私も上位に推薦したものであったことから、審査者の間では概ね価値観が共有されていたのだと安心しました。多種多様な研究計画書に接し、真に創造的な研究とは何かを私自身あらためて考えることができ、感謝しております。

#### 新谷優先生（法政大学）

選考にあたり「良い研究」とは何かを改めて考えさせられました。先行研究を綿密に調べ上げ、それを発展させるべく練り上げられた研究と、斬新な方法論で既存の理論を検討しようとする研究、より良い社会の構築へ直接貢献しうる研究。何が「良い研究」なのかは最終的には研究者の価値観によるのかも知れません。これらの異なった次元に対する個人的な好みは優劣の判断に影響するのはフェアでないと考え、それぞれの次元で、一つでも他の申請書を圧倒していると感じたものに高得点を付しました。最終的に選抜された研究には各領域において優れた研究が含まれており、複数の次元から見て「良い研究」だと言えます。全体としては、一つめの「既存理論発展型」の申請書が多いという印象を受けました。理論的な発展を研究の目的として掲げている研究は、なぜそのような理論的な発展が必要なのか、というところまで掘り下げて記述すると、社会貢献としての研究の価値が高められますし、研究計画に関しても、その方法を選択した理由まで説明すると説得力が増すように感じました。緻密な研究が多い中、研究の視野の大きさが選考の決め手になったように思います。

#### 村上史朗先生（奈良大学）

応募者の皆さんの申請書のレベルが全体的に高く、私が最初に「A 評価になりうる」とリストアップした申請書は 14 件でした。そのため、A 候補の 5 件を選ぶことに非常に苦労しました。今回受賞に至らなかった方々の研究計画にも有望なものは数多いので、自信を持って研究を進めていただければと思います。また、若手研究者への賞として審査の際に重視していたのは、研究計画の完成度だけでなく、新たな問題へのチャレンジも積極的に評価したいということでした。結果として、今回は比較的計画の完成度の高い研究が受賞していますが、決して大胆なチャレンジを評価していないわけではありません。今後この賞へ応募される方々にも、是非挑戦的な計画を立てていただければと思います。また、挑戦的なテーマ設

定をする際にお願いしたいのが、基本ではありますが「目的、仮説、方法の一貫性」を入念にチェックして欲しいということです。私自身は、挑戦的な研究では完成度よりもテーマの魅力の方が重要だと考えますが、さすがに「研究目的と測定などの研究内容がずれているため、予期された結果が出ても研究目的を達成できない」場合などは評価できません。その意味で、せっかく重要なテーマを取り上げているのに惜しいと感じた研究が数件ありました。先行研究が豊富な堅実な研究とは異なり、挑戦的な研究では特にこの一貫性が崩れがちになるので、注意を向けていただければと思います。